

2020.5.3 第一主日礼拝

ヨハネ 16:1-11 「助け主なる方」

聖書

- 1 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまりずくことのないためです。
- 2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。
- 3 彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。
- 4 これらのことをあなたがたに話したのは、その時が来たとき、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしは初めからこれらのことを話すことはしませんでした。それはあなたがたとともにいたからです。
- 5 しかし今、わたしは、わたしを遣わされた方のもとに行こうとしています。けれども、あなたがたのうちだれも、『どこに行くのですか』と尋ねません。
- 6 むしろ、わたしがこれらのことを話したため、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。
- 7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。
- 8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。
- 9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。
- 10 義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。
- 11 さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです。

はじめに

皆さんに約3年半という時間が与えられたら何をしますか？ その3年半に何かを成し遂げなければならないとしたら、3年半は長いでしょうか、短いでしょうか。しかも何も無いところから始めるとなったら…。3年半は決して長いとは言えません。むしろ短いと思うでしょう。イエスさまが地上で、神の御子として公の生涯を過ごされた時間はおよそ3年半です。30歳で人々の前に姿を現わされ、そこから十字架に至るまでの時間が3年半です。その公生涯を共にしたのが弟子たちです。特に12弟子はイエスさまと濃密な時間を過ごしました。通常弟子とは師匠から学ぶ立場にあります。時には師匠が言うことを理解できない時もあるでしょう。イエスさまの弟子たちもそうでした。数々の奇蹟を見ながら、また神の国の話を聞きながら「いったいこの方は誰なのか」という疑問を持ちつつ3年半を共に過ごしたのです。イエスさまのなさる御業（奇蹟）や語られることばが理解できなかったのは、弟子たちの頭脳や知識の問題ではありませんでした。イエスさまが語られたことばの背後には父なる神さまの御心が示されていたのですが、それをことばだけで捉えようとしても限界があるわけです。ですからイエスさまはしばしばたとえ話を使って分かりやすく説かれたのですが、それでも弟子たちにはよくわからなかったわけです。なぜなら、イエスさまのことばには霊的な意味が含まれているので、それを説き明かしてくれる「だれか」が必要なのです。その「だれか」が聖霊なる神さまなのです。私たちの目をもっと開いていただくために、今日から5/31のペンテコステまで、聖霊なる神さまに目を向けたいと願っています。

1. 聖霊の働きに期待しよう

前置きが長くなりましたが、まずイエスさまのことばを理解するために聖霊の助けが必要であることを心に留めましょう。皆さんに、聖書を読む時の心構えとして聖霊の助けを祈って聖書を読みましようと呼びかけるのは、そのためです。聖書は歴史書や詩歌、預言書や文学書としての性格を持っていますが、創世記から黙示録まで66巻すべてが「神のことば」です。行間を読むという表現があるように、聖書を読みながらことばの背後に神のみこころを汲

み取る作業が必要になり、それを助けてくれるのが聖霊です。聖霊の助けを祈って聖書に向かうなら、聖霊は私たちの目も心も開いて、神さまの御思いを示してくださいでしょう。

イエスさまは弟子たちの理解が及ばないことを十分承知の上で、しかも3年半しか時間が与えられていない中で「これらのことをあなたがたに話したのは、その時が来たとき、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。」(4節)と、伝えるべきことを伝えて行かれたのです。間もなくご自分は十字架にかけられて殺されることを知っておられたイエスさまは、弟子たちにそのことを予告されました。「しかし今、わたしは、わたしを遣わされた方のもとに行こうとしています。」(5節)と語られたとき、弟子たちは「悲しみでいっぱい」(6節)になったとあります。弟子たちにとってその意味は十分理解できていなかったとしても、大きなショックを覚えたことは想像に難くありません。イエスさまはご自分がこの世を去っていくことは、弟子たちにとって益であると言われました。その意味するところは、何でしょうか。

2. 制限から無制限へ開かれる

イエスさまがこの世を去ることの意味は7節にあります。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。」

ここにはイエスさまが世を去った後、助け主を遣わすとあります。この助け主が聖霊なる神さまのことです。助け主については後で詳しく見てみましょう。因みに、キリスト教会が大切にしている教理として三位一体の神という教えがあります。父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の3つの位格を持つ方が一つであるというものです。ですから私たちが神さまということばを使うとき、それは同時に御子イエスと聖霊を指しており、他の呼び名で呼ぶときもしかりなのです。聖霊は三位一体の第三位格を持つ真の神であることを覚え、この聖霊なる神さまが助け主としてイエスさまの後を引き受けて

くださるのです。今私たちは西暦 2020 年を生きていますが、イエスさまが昇天されあと聖霊が降られた時代、すなわち「聖霊の時代」に生きているのです。

イエスさまは弟子の悲しみをよそにご自分がこの世を去ることは益だと言われました。それは、「制限あるもの」から「制限のないもの」へと変えられるからです。イエスさまが地上で歩まれたとき、私たちと同じ身体を持って歩んでくださいました。人は同時に異なる場所に存在することはできません。イエスさまも同じです。伝道の旅の先々で御業をなさいましたが、同時に他の場所で助けの手が上げられても、そこに行くことはできませんでした。しかし、イエスさまが昇天されたあとに来られる聖霊は、霊なる存在ですから時間や場所に制約されることはありません。この世の制限から解かれた自由なお方として、いつでも、どこでも、誰にでも共にいることのできるお方として存在しておられるのです。今も日本中で、世界中で多くの人が祈りをささげています。そのすべての祈りに聖霊は答えることができるのです。それは霊なるお方だからです。霊なる存在ゆえに、物質世界に閉じ込められている人間には理解しがたく、得体の知れないものとして退けられてしましますが、霊なる存在ゆえに私は心強いと思うのですが、皆さんはいかがでしょう。「いつでも、どこでも、誰にでも」を可能にし、無限に働いてくださるゆえに、この方を身近に捉えるならそれに勝る平安・安心はないと思うのですが、どうでしょうか。今、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために集まることを自粛しています。顔と顔を合わせることができないからこそ、聖霊がともにおられるゆえの一体感を皆さんは強く感じておられるのではないのでしょうか。聖霊による一体感を実際に味わうために、一日も早く集まって礼拝をささげる日がくることを祈っています。

3. ともにおられる聖霊

聖霊の働きの特色を二つ上げてメッセージを締め括ります。一つは「助け主」についてです。助け主については、すでにヨハネ 14:12-24、15:26 に記されていますから、ヨハネ 16 章は 3 回目の言及になります。ヨハネ 14:16

には「父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてください。」と記されています。聖霊を「もう一人」と言っていますが、最初の助け主はイエスさまご自身です。その後に来られる「もう一人の助け主」はいつまでもともにいてくださると約束されています。

助け主のことをギリシヤ語でパラクレートスと言います。パラクレートスとは、「そばに、傍らに」を表す「パラ」と、「呼ぶ」を表す「カレオー」から造られた「パラクレオー」から来ています。ことばの意味から、私たちが困ったときに「ねえ、ちょっと来て」と親しみを込めて呼ぶ感じで捉えていただいたら良いと思います。助け主なる聖霊は、いつでも、いつまでも、いっしょにいてくださる方です。私たちのあらゆる助けのために常に寄り添ってくださり、味方となって守り支えてくださるお方です。助け主は慰めを与え、教え導いてくださるお方です。ヨハネ 14:16 の欄外に「援助者、とりなし手」を意味すると注釈がついていますが、これが助け主の姿です。私たち人間にも不完全ながら聖霊の働きが委ねられていますので、「援助者」となり「とりなし手」となって、困難を抱える方の傍らに立つことができます。勿論肉体を持っている限り限界がありますが、その限界を完全に越えたお方として真の助け主である聖霊がおられることをぜひ知って頂きたいと願います。「わたしは、あなたがたと捨てて孤児にはしません。」(ヨハネ 14:18) とありますように、永遠の御国に至るまでともにいて守り導いてくださる方が、今日あなたの傍らにおられるのです。だからどんなことがあっても大丈夫です。

4. 世に誤りを認めさせる聖霊

聖霊の働きのもう一つの面は、「この方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。」(8 節) という、世への働きかけにあります。ここに「罪について」「義について」「さばきについて」と3つのことが指摘されています。罪について聖書が何と言っているのかは、聖霊の助けがないと分からないのです。聖書は、人はみな罪びとだと言いま

すが、それを自分に当てはめて、「私は本当に罪びとなんだ」と心の底から思えるのは、聖霊が働いてくださるからなのです。また、イエスさまは義なる方、すなわち正しい方であったということも聖霊が働いてくださらないと理解できないのです。当時の人たちはイエスさまを犯罪人として処刑しました。イエスさまの十字架は単に宗教犯、政治犯として処刑された以上のことが含まれており、人の罪の贖いとして死を受けてくださった神のご計画が示されたのです。これを明らかにしてくださるのが聖霊なのです。そして「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル9:27）とある死後のさばきと報いも聖霊によらなければ正しく理解することができないのです。罪について、義について、さばきについて、世には色々な考えがあるのでしょうか。自分に都合よく解釈していることもあるかもしれません。しかし、それが神さまの御心に沿ったものなのかどうかを聖霊は教えてくださるのです。

この世が示すものの中には神さまの愛や義など良きものも含まれています。しかしそうでないものも含まれています。何が正しく何が間違っているのか、聖霊はご自身の光をもって私たちに示してくださるのです。聖霊の声や聖霊の示しに対してアンテナを立てて、聖霊が喜ばれることを選び、聖霊とともに歩みましょう。

まとめ

イエスさまの昇天後、助け主なるお方として来られる聖霊に目を向けました。イエスさまを信じ受け入れるとき、聖霊はその人の内に宿ってくださいます。今週も聖霊を内に宿し生きる者の幸いを味わいましょう。集会の制約の中で、聖霊と「ともに」、愛する兄弟姉妹と「ともに」ということを意識して過ごしましょう。聖霊はお互いを繋ぐいのちの絆です。